

# パーソナリティテストとしてのSCT に関する一考察

——特に応用とその解釈をめぐって——

駒 崎 勉

## 1. ま え が き

今日、文章完成法検査（以下SCTという）は、パーソナリティ研究の分野にとどまらず、臨床面の応用のほか、企業や学校などでも使用され、入社試験、適正配置、スクリーニングとしての診断用など、広範な活用が行われている。比較的手軽であり、集団適用も出来、検査結果の整理もある意味では簡単ということから、その使用される頻度も高く、心理テストバッテリーには、たいてい組みこまれているといってもよいほどである。しかし、手軽さのゆえに、かなり安易な解釈の仕方も通用し、その弊害も少なくない。

筆者は、1965年から数社の企業の入社試験と、適正配置資料の作成、情緒的障害者などの発見と診断を目的とした、SCTおよびロールシャッハテストの判定と診断にたずさわってきた\*。この小論では、その結果の一部と、筆者のSCTについての見解をまとめてみることにした。

## 2. SCT の位置づけ

SCTは1897年、Ebbinghous, H. が考案したといわれる。Ebbinghousは、知能の構造を文章完成法を通して明らかにしようとしたらしい。その限りでは一種の知能検査として出発をみたのであった。文章は昔から、主として知的機

\* 精神衛生普及会（社団法人）からの委託でこれを担当した。

能の所産であり、パーソナリティ全体の機能としての色彩は、あまり濃くなかったことを考えると、こうした知能研究としての出発点や発想も、また無理からぬことであろう。

このあと、ややおくれて Freud, S. や Jung, C. G. らによる連想検査 (association test) が発展してきた。精神分析としての連想検査は、検査者が用意したさまざまな単語をいい、患者はその単語から連想したことを、なんでも自由に語る方法である。この点、SCT と実によく似ている。刺激語をオーラルで与えるか、ペーパーで示すか、ただそれだけの相違のようにも思える。そこで SCT と連想検査とは、ともに語られることが多い。しかし、SCT と精神分析としての連想検査とは本質的な相違がある。肉声としての刺激語は、被験者 (患者) をして、より情緒性をかき立て、深層に潜むコンプレックスを表層化できよう。その点、SCT は、紙筆を通して、というワンクッションが、むしろもうすこし表層的な、ある意味では、やや "よそ行き" の装った姿の深層心理が表面化してくるのである。あとにも述べるように、かえってこの点が SCT の魅力ともいえるのである。

そのご、SCT は 1930 年ごろから飛躍的な発展をとげ、次第にまた体系化も進んだ。すなわち、1928年、Payne, A. F. が職業指導にこれを用いていわゆる適材適所を計ったことが今日の企業における SCT 使用の嚆矢となったといってもよく、また、臨床面では、Tendler, A. P. が 1934年に情緒との関係を研究したことがその発端となった、といってもよい。それでは、こうした SCT の役割分野ないし効用について、かんたんに類別してみよう。

(1) **臨床面の効用** 本来精神分析にきわめて類似ないしは近似した性質をもっていると理解されているように、SCT の臨床面における役割、効用は非常に大きい。たとえばノイローゼや初期の躁うつ病など、比較的 SCT に現われやすく、犯罪心理の領域では非行少年の非行性の発見に有効であることは注目される<sup>1)</sup>。現在、児童相談所、少年鑑別所、刑務所などの矯正施設で多数使用されている。

(2) **態度の研究** SCT は多くの心理検査のなかで、とりわけ態度の研究

調査に使われてきたようである。とくに肉親に対する態度，人種問題，学校，職場の人間関係など，本心を把握しにくいようなものに比較的有効である。これについては Goldberg, P. A. が多くの研究例を紹介している<sup>2)</sup>。態度の研究に使用され，効果が大であったということは，SCT が極度に深層の心理を検証する性質のものではなく，かなり社会的な関わりをもったパーソナリティの部分の，しかも本心が現われてくることを示すものであり，SCT の特質をうかがわせることといえよう。

(3) 原理的な研究におけるもの 他の種類のパーソナリティテスト，とりわけ投影法検査と同様に，SCT がパーソナリティの全体像をよく捉え，精神構造や機能を解明するうえに役立っていることはいうまでもない。しかも，後述するように，TAT やロールシャッハテストなどでは，つかみがたいパーソナリティの側面を描き出すことが出来る点で特筆に値する。

さて，SCT の歩んだ歴史のなかで，それに対する評価や位置づけは研究者の間でもかならずしも一致していない。たとえば，大まかにいって，SCT をまったくの投影法とするものと，質問紙法検査と投影法検査のちょうど中間的性格をもつものという評価をするものである。前者は，Rohde, A.<sup>3)</sup> のように，SCT を，被験者が自由に反応し本当の自己を無意識的に表現してしまうものとして完全な投影法と認めている。さらに，長谷川<sup>4)</sup>は，SCT は被験者の意識的，無意識的な諸経験や信念，態度，性格などを文章作成の作業を通して反映するものであるから，ロールシャッハ，TAT，PFT などとともに投影法検査と呼ぶにふさわしい，としている。しかし，後者の立場をとるものは，SCT は答を(反応を)どうしても書けてウソをつくことが可能であり，ウソをつくことが出来るということは，質問紙法の宿命であるから，これは質問紙法に類似したものだ，という考えをもっている\*。

これらの立場は，ただ SCT の機能や役割評価がそれぞれ異なる，ということだけではなく，検査自体の価値が前者では好意的に，後者にあってはやや批判

\* また，Rotter, J. B. (1950)<sup>4)</sup> のいうような，なかば出来上った(構成された)投影法，という表現は興味ある評価である。

的といってよいようである。ただ、大方の SCT を研究する専門家にとっては、前者の立場をとるものが多い。

しかし、ここで問題とすべきことは、SCT が典型的な投影法検査であるかどうか、を論ずることではなく、SCT が他の投影法検査であるロールシャッハテストや TAT などと比較して、パーソナリティのどの部分を探ることができるか、ということである。SCT とロールシャッハテストとを併用して用いた筆者の場合、SCT はすくなくともロールシャッハテストとはかなり異った部分を検査していたように思えた。もちろん後述するように、かなり重複した部分を、それぞれ異った表現で二つのテストが検証していたこともあった。しかし、少なくとも、SCT が具体的な人間関係のあつれきや葛藤をかなり明確に把握しえたことは強調してよいと思う。その点は、TAT にむしろ似た機構をもつようである。

加えて、SCT が、文章という、もっとも社会的、文化的手段とテクニックで被験者は答えなくてはならぬので、パーソナリティの生物的ともいべき本能的な深層部分と、社会化された表層との部分の、ちょうど中間層が露呈されるということ、これは非常な特長といってよい。しばしば投影法が、容易に人間の手の触れられぬ深層部分を明らかにすることで、その神秘さや価値が強調されるが、しかし、多くの社会的圧力によって、なかば装いを施した半意識層こそ、日常の臨床面などでは重要なことはいうまでもない。むしろこの部分こそ、もっとも心理的場面において発言力のあるところなのであろう。この辺に SCT が焦点をあてていることは疑いのないところである。

すべてのテストは全能ではない。守備範囲は、おのずと限定される。SCT もこの限りにおいて、同様なものであることはもちろんである。しかし、SCT がたんに社会的行動や家庭環境といったものを調査するフェイスシートまがいに考えて、安易に実施している企業なども散見する。これは大変な誤りといわねばなるまい。SCT はパーソナリティのある部分、それも代表的な投影法であるロールシャッハの適用範囲でない部分がカバーできるという点が筆者の立てた仮説であり、SCT は、すぐれたパーソナリティテストの重要なバッテリ

一の一つであることを強調したい。この小論のタイトルを「パーソナリティテストとしての——」としたことも、SCT の位置づけをその辺におきたかったからにはほかならない。

### 3. SCT の応用 (特に企業における応用)

筆者は、1965年から1976年まで、およそ 520 例の SCT を集団ロールシャッハと併用して実施した。小論のセクション 5 において、それらの結果の一部を示すことにするが、ここでは、まず、SCT の職場における応用について触れておきたい。

**i SCT の意義** SCT はすでに述べたように、最近、採用試験や従業員の適正配置に広く応用されている。かつてはクレペリン検査とか向性検査などがその主流を占めていたが、これらの検査が手軽く実施は出来たものの、その検査対象がいきおい、表層的な行動習慣や特性に限定されがちであり、条件の僅かな変化に対応した人間のダイナミックな反応を検証するには必ずしも十分とはいえないものであった。最近の企業活動は肥大なメカニカルなシステムの中で人を動かし、そこでは従来のような表面的な人間の特性理解ではもはや役に立たなくなったといつてよい。たとえば、表面的な温和さをよそに、その底に潜む欲求不満があるとか、あるいは自他ともに許す律義さが、実はルーズさの反動形成 (reaction formation) あった、などといった診断的、力動的理解が企業内部で要請されるようになったのである。さらには一生の大半を職場で過し、その中における精神的な健康さが生き甲斐にも関係する時代ともなった。こうした場合、ロールシャッハや TAT では、少々、目がこまかすぎ、心理学専門家の少ない企業では、かならずしも十分な効果を発揮しえないのことも、また事実である。このへんにも、手軽な SCT が、その利用度を高めていくのも、また当然のことといつてよい。

**ii SCT の内容** SCT の内容には、十分に吟味された項目が使用されるべきであることはいうまでもないが、しかし、また、あまり形式にこだわる必要もない。第 1 表には SCT のうち、もっとも代表的なものの一つである精研式

の Part I を示したが、およそ、このあたりを目安として、ときには使用者がその目的に適したように、たとえば採用試験なら人間関係を重視する項目を加えるなどして作成してもさしつかえない。ただ、そのさい注意すべきことは、Tendler, A. P. も指摘したように、1) 情緒的反応を直接的に引きおこすもの、2) 自由に反応ができすぎて、こんなことを書いてはまずいのではないか、と思わせるような刺激語は避けるべきであろうが、長谷川<sup>4)</sup> が指摘するように、画一的な反応に傾かず、自由になんでも書けそうな刺激語こそ、基本的なもっとも重要な基準といえよう。また、これらに加えて、1) イデオロギー的な判断を迫るようなもの、2) 道徳的価値判断を直接的に迫るもの、なども避けるべきであろう。これらの問題は、たとえ答え得たとしても、真の自己を表現したものではなく、こうした検査アイテムは、実施の進行中、意図的に反応全体をも歪曲化するおそれもある。

#### 4. SCT の効用と限界

次に SCT の効用と限界について触れておこう。

まず、効用についてであるが、簡便で、集団使用が出来、スクリーニング的効用は十分評価されてよい。質問紙法とちがい、具体的な生活を営む“人間”を把握できることも特長である。“文は人なり”のことばの通り、いわゆる人柄の理解もつかめる。また、YG や向性検査などで、かなり外向的に出たものが、SCT では、葛藤や、不安などが意外に出て、その小心翼翼とした姿がうきぼりされることがある。このように、SCT は質問紙では捉えられない、かなり深い内的なレベルが診断できる。さらに精神病質パーソナリティや初期の精神病の発見にもあるていど有効である。なお、SCT の本旨からははずれるが、筆圧や筆跡による判定も、見逃がすことが出来ない副次的な効用といってよい。

次に限界について述べておこう。

まず、書くことが出来ぬものにとって、SCT は無力である。知能があまり高くない被験者は、きわめてすこし、しかも貧弱な内容の反応しか得られな

い。この場合、SCT は、知能が低い、ということ以外さっぱり判らぬ検査、ということになってしまう。次に SCT の解釈の統一化が困難という欠点も挙げられる。しかし、これは投影法の宿命であり、逆に自由奔放な診断法こそ投影法の長所ともいえるものであろう。

SCT は投影法としての機能をそなえていながら、しかし、ロールシャッハや TAT など代表的な投影法よりも、やや守備範囲は狭く、しかも目の粗い検査であることも否めない。時に、かなり明確な問題点を見のがす確率が高いことは事実である\*。そこで、SCT は手軽な投影法と、やや目が粗い、という長短二つを考慮して、かならず他のテストと併用して用いるか、単独使用ならばあくまで目の粗いスクリーニングであることを考慮して使用すべきものであろう。

この点、具体的な社会生活の場合の判定により有効な SCT と、どちらかといえば、人間の原理的な理解を重点を置くロールシャッハテストとの組み合わせなどは、もっとも完全に近いテストバッテリーであり、重複した適用範囲も比較的少ない例ということができる。

## 5. SCT の解釈と判定をめぐる問題

SCT のマニュアルには、多くの研究例から到達した結論として、その解釈の一般的パターンが示されている。たとえば Rohde, A. は、Murray, H. A. の TAT と同様、欲求と圧力の概念を用いて分析したり、PFT のような内、外、無罰式の分析も行われている。しかし、SCT をまったく異った種類の投影法検査が用いている判定法で使うことは、あたかも、物さしで体重を測定するようなものであろう。

また、さきに示した精研式 SCT\*\* では SCT が検証しうるいくつかのカテゴリーを考えて、それらのカテゴリーについて判定者は、一つ一つ埋めていく

---

\* 筆者の 520 例中、ロールシャッハテストではまったく異常が認められぬものに、異常者（分裂病の疑い）2 例を SCT で検出した。ときおり SCT できわめて有効なケースが見つかることもある。

\*\* 佐野勝男、榎田仁らによるもの。

訳であるが、カテゴリーがパーソナリティ全体と、それをとりまく諸問題だけに、判定者にとって容易な作業ではない。因みに精研式のカテゴリーとは、次のようなものである\*。

### I パーソナリティ側面

i) 知的側面 いわゆる知能以外に、発達的に精神的な分化が来ているか、自己や環境の客観視が出来るかどうか、などもみる。

ii) 情意的側面 性格類型や性格特性などの評価、とくに精神医学的な性格類型として、分裂気質、循環気質、粘着気質、ヒステリー気質、神経質等について判定する。

iii) 指向的側面、生活目標、人生観、キャセックス (Cathexis) など心的活動の主たる方向をみる。

iv) 力動的側面 情緒の安定、不安定、コンプレックスの有無、不安や攻撃などのメカニズムをみる。

### II 決定要因

i) 身体的要因 健康度や容姿など

ii) 家庭的要因 家庭の雰囲気、両親との親子関係、生活水準など

iii) 社会的要因 近隣、学校、職場などにおける人間関係、社会的地位についての態度など

以上のようなカテゴリーについて判定するわけであるが、SCT の一つの項目が、すべてのカテゴリーについて資料を提供するわけではむろんない。たとえば、筆者の扱った多くの例でカテゴリーとそれがもっとも現われやすい項目との関係を一部示してみよう。精研式 SCT Part I のテストでは、第1表のようになる。したがって、もっとも重要な反応の出やすいものを選択的に使用することも、検査時間のとれない場合など考えてもよいように思う。

さて、今まで述べてきたように、SCT の判定には、その簡便さと同時に、判定の手がかりと、診断しうる対象が、かならずしも明確ではなく、投影法ゆえのむつかしさを感じさせるものがあった。そこで、筆者は、精研式 SCT の

\* カテゴリーの説明については文献5)の花沢成一による。



第1表 SCT の項目と反応内容との関係

精研式 SCT の Part I の項目	比較的現われやすい反応
1 子供の頃私は	健康状態, 親子関係
2 私はよく人から	社会的背景, 社会的欲求
3 家のくらし	*
4 私の失敗	*
5 家の人を私は	家族関係
6 私が得意になるのは	知的レベル
7 争い	*
8 私が知りたいことは	知的レベル, 欲求など知的, 指向的側面
9 私の父	
10 私がきらいなのは	情緒性, 情緒の成熟度
11 私の服	*
12 死	知的レベル, 情緒性, 適応機制
13 人々	
14 私のできないこと	知的レベル
15 運動	*
16 将来	欲求など指向的側面
17 もし私の母が	家族関係, 情緒性
18 仕事	社会的関係
19 私がひそかに	指向的側面
20 世の中	人生観
21 夫	
22 時々私は	
23 私が心をひかれるのは	*
24 私の不平	*
25 私のきょうだい(しまい)	
26 職場では	*
27 私の顔	*
28 今までは	自己の客観視の程度
29 女	男性なら性への態度, 女性の場合は夫や結婚観
30 私が思い出すのは	*

\*印は、比較的画一的、もしくは平板的な反応が出やすい項目のようである。

判定カテゴリーと併せ用いる意味から、反応パターンによる分析を行ってきた。ここでいう反応パターンとは、前述の約 520 例の内 356 例について、被験者の反応にいくつかの共通したパターンがあることに着目したわけである。む

第2表 SCT にあらわれた反応類型とその頻度など (356例)

タイプ	出現頻度	内容例, 特徴など	パーソナリティ特徴, 問題点など	集団ロールシッパとの関係
1 固執型	3%	内容・反応型に変化が乏しい。特定の対象に固執し、特に最初の項目で反応したものにくり返し反応する。〈例〉「家」ならば終始「家」のことばかり	柔軟性の乏しいパーソナリティ, 環境の変化にすぐ対応できない。偏執的性格。	F%が高い
2 感情型	5%	短かい感情を表わす言葉が多い。〈例〉「仕事」…つらい「母」…こわい	知的レベルは一般的に低いことが多く, 感情のコントロールが不十分, 衝動的傾向強し。	C, CFが目立つ
3 冗長型	8%	反応表現がくどく, 2行ではたりない。結局全体の半分ぐらいで終わってしまう。字はていねいであることが多い。	神経症的傾向。小心劣等感情, 特に自信欠除で潔癖何んでも自分でやらないと人まかせでは気がすまない。	
4 抽象型	7%	人に理解できないようなことを好んで書く。とくに難解な言葉を羅列する。〈例〉墮落の中の道徳, 敗北の中の勝利, 虚空と現実の輪廻(りんね)	精神的虚栄, 自分をよくみせたい, 劣等感情の表現であることが多い。	Mは少なくF反応多し。Abstの内容もやや多いか?
5 自己中心型	10%	自分中心のテーマが多い。〈例〉「私は」のところで強く反応し, 他の項目でも「私は」を連発する。	パーソナリティの未成熟な女性に多い。	Mは少ない
6 空想・詩的型	5%	仮定的な非現実の世界や, 詩のような文章をつくる。〈例〉「もし私が蝶であったら…」, 「甘い香りと美しい花, その中に私は遊ぶ」	ヒステリータイプ, 逃避的機制, 依存心強し。能力のないことのカバー, テストへの自己防衛など。	C, CFが目立つ
7 道徳型	4%	とにかくきれいごとを書き並べる。	平凡な人, とくに非道徳的な傾向の反動形成であることから要注意。	P反応多し
8 質問型	2%	疑問の型で結ぶ反応が多い。〈例〉世の中とはつらいものなのではないでしょうか?	自己不確実型, 自信欠除, テストへの不安や反抗。	
9 拒否型	2%	〈例〉それはいえません, こんなことに答える必要はないと思う。	自己防衛, 攻撃的機制。テスト内容からショックを受ける。	Rejectionは別に多くない

10	流行語型	4%	流行語をたくみに反応に組み入れる。「いわば殺される側の論理です」といったような場合はこの類型でない。 ＜例＞恋愛一限りなく透明に近い灰色	一般的には大学生に多い。強い自己顕示欲求，軽薄なタイプ，自由奔放，明るい性格など。	反応数多し
11	配分型	18%	量と時間をきちんと計算し，最後まで傾向も同じ。内容も当りさわりなく優等生型反応	常識的人間，ステロタイプ型の反応，創造性に欠くがきめられたことはよくやる。	F 反応多し
12	半ページ型	20%	半分しか書けない。大学生で40～60分間を使って全部書けぬようでは，なにか問題がある。	全般的な能力欠除，総合力の貧弱，意志弱し。	FM 反応多し。Contents 乏し
13	多弁型	6%	沢山書き，しかもほぼ全部書き終る。	一般的には知能が高く，書くことに馴れている。文科系の人だが，時には自己顕示，派手まれにはマニエー的性格である。	反応数は必ずしも多くない
14	修正型	3%	やたらに書き直す。	テストを気にしており，一過性のショックのケースが多い。まれには葛藤の表われ。	
15	感嘆型	3%	＜例＞お金がたくさんあればいいんだがなあ，なんとすばらしい人生であろうか。その他，感嘆符で終るようなもの。	女性的性格。末っ子や1人っ子に多い。甘えん坊，わがまま他人への期待と依存	
16	批判型	5%	発散や批判のような反応＜例＞こんなテストで人間は分らないと思います。バカバカしいけれど仕方ないからテストを受けるがこれで私の心が分たらこっけいだ。人の心なぞ一枚の紙で分るはずがない。	攻撃的機制，自己顕示欲求，活発，元気，自己主張，自信過剰，文句をいう型の場合には甘えを含んだ劣等感の表現であることが多い。がんばりや。	S 反応との関係はないようである。
17	性的反応型	2%	性的な事柄を大っぴらに書く。女性にはめったにない。とくに性器そのものと，性交に関するものが問題。ロールシャッフの性的反応以上に問題がありそう。	抑制のきかない人，わがまま，ときに精神分裂病のうたが。ただし職業によっては問題ない。	
18	その他これといった特徴のつかめないもの	21%			

\* 2つつ以上のタイプをもつものもあるので%の total は100にならない。

ろん、その数量化、客観化は出来ないが、投影法検査にその必要もない。以下、356のサンプルがもっとも出現しやすいパターンを第2表に示してみよう\*。なお、こうした類型化は、たとえば高橋<sup>6)</sup>の挙げているタイプと一部重複している。むしろこれは出現する頻度が高いということで当然であるといってい

い。こうした検査反応の類型化は、ある意味で体系的な心理検査の仕組みを破壊することにもなり、あまり感心したことではたしかにない。しかし、多面的なパーソナリティのすべてを SCT がとらえられるものではないことは、すでに述べた通りである。そうであるならば、パーソナリティや環境の決定要因すべてについて、SCT の反応を読みながら判定を下すことは、容易なことではないし場合によっては徒労にも近い。そこで反応をあるていど類型化することも、また止むを得ぬことといえよう。この類型化のころみは、筆者が企業の採用試験、配置転換のさいの SCT と集団ロールシャッハテストを通して得たものだけに、その用途もおのずと限定されよう。たとえば、学校内における学生指導の資料や、やはり企業における使用でスクリーニングとして役立つものと思われる。

さらに第2表の右端に、ロールシャッハテスト結果との相関ともいうべき備考を付しておいたが、ある場合は、SCT とロールシャッハの結果に、納得のいくものもあれば、また、ある場合は当然、相関が予想されながら結果が出ないものもあった。例えば、感情型や空想型にロールシャッハの C や CF 反応が多く、情緒の未熟さを示し、半ページ型やとびとびの反応型では、能力の低さを示すかのようにロールシャッハでは FM 反応が多く、ロールシャッハの Contents も単調で質的に乏しい。ところがその反面、たとえば抽象型にロールシャッハの抽象的反応が多いかといえそうでもないし、拒否型や批判型に、Location の S や WS 反応がほとんどみられない。また、多弁型にはロールシャッハの反応数が多いかといえ、これも必ずしもそうでない。

\* もちろん類型化といっても、その基準は厳密にはもとめがたい。概してその傾向があれば、一つの類型にあてはめてしまう、という方法をとらざるを得ない。

このように、ある部分は SCT とロールシャッハは共通し、ある部分は、パーソナリティの全くことなるところをみている、というすでに述べた仮説は、正しいように思われるのである。

## 6. 結 語

SCT はその表面的な簡便さから、気易く企業などで専門家以外の人を使う心理的検査といえよう。しかし、SCT の反応が明確な文章となって表われてくるだけに、もしその解釈を誤まれば、時に書かれた反応とはまったく反対の傾向として理解されてしまうおそれも生ずる。SCT を扱う人は、出来うれば心理学専攻の人であることが望ましいが、そうでない場合、すくなくとも SCT の心理検査としての位置づけや性格を十分理解し、その上に立って解釈、判定のテクニックを習得すべきものであると思う。この小論の中で示した SCT の性格や位置づけ、そして具体的な反応を基とした判定上の類型化のころみみ、いくぶんでも検査者に利便を供すれば望外の幸せである。

### 参考、引用文献

- 1) 高橋雅春：法務省式文章完成法解釈手引，法務省矯正局編，1965.
- 2) Goldberg, P. A.: A Review of Sentence Completion Methods in Personality Assessment, J. Proj. Tech. and Personality Assessment vol. 29, 1965.
- 3) Rohde, A.: Explorations in Personality by Sentence Completions Method, J. appl. psychol., vol. 30, 1946.
- 4) 長谷川浩：心理検査学（言語連想検査と文章完成法検査）第 8 章，1975.
- 5) 安藤公平，大村政男，花沢成一：心理検査の理論と実際 VII-3(文章完成法テスト) 1967.
- 6) 長谷川浩：文章完成法検査 臨床精神医学，vol. 2, 8, 1973.
- 7) 佐野勝男，榎田 仁：精研式文章完成法テストの手引，1974.